台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 103-126
2017-03-31 收稿，2017-05-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.103

太宰治「清貧譚」試論
—登場人物的改寫與同時代東亞情勢之關連—

何資宜*

摘要

太宰治「清貧譚」(『新潮』1941.1)，乃以「聊齋誌異中的一篇」（筆者注：「黃英」）為基底，由「二十世紀日本作家」「發揮不遜之幻想」改寫而成之「創作」。

作品中確實能看到「異類婚・報恩這個承襲自原著之主題」，隨著故事發展亦可結論為「發揮異於常人的種菊能力，讓一家朝富饒方向發展之報恩譚」。然而，太宰治所改寫之三位登場人物言行，卻隱隱透露著與「充滿愛情」的「報恩譚」格格不入之感。

本研究首先聚焦於登場人物之言行，透過與原著之間的差異，點出「奇妙的」「一家三口」構圖與同時代東亞情勢之接點。爾後，檢討「清貧」一詞的反語要素，勾勒出隱藏於「新體制」之「浪漫主義」口號的背後，實則暗藏著戰爭期日本的政治經濟（現實）問題。

在中日關係緊張之際，刻意取材於中國「古典文學」,「創作」諷刺內閣鼓吹之「新體制」作品，正可謂「二十世紀日本作家」「不遜」之作為。

關鍵詞：聊齋誌異、黃英、新體制(東亞新秩序)、日滿支、浪漫主義

臺灣大學學術期刊資料庫

* 國立高雄大學東亞語文學系助理教授

Study on "*Seihintan*" by Osamu Dazai — Correlation between the Rewriting of Characters and the Situation in East Asia at the Same Time —

Tzo-i Ho *

Abstract

Osamu Dazai's "*Seihintan*" ([Xin Zhao] 1941.1) is based on one piece (Huang Ying) of *Strange Stories from a Chinese Studio* and is a rewritten "creation" of "wild imagination" of "a Japanese writer in the 20th century" (I). Since the rewriting is significant, we find that most studies in the literature are comparative papers of the original work and related to the writers' attitude during the period of the war after comparison and writing intention.

Based on the literature, when studying the work, it is a common view to not follow the literal "Qing Ping" of Saino Suke. The literature is full of studies on the relationship among the characters. Of particular note is "Type of the strange story of Japanese marriage" that was proposed by Kimura Sayo (2012.3).

As for "the topic strange marriage • gratitude from the original work", it literally appears in Osamu Dazai's "*Seihintan*". The whole work can be concluded as exhibiting an "exceptional chrysanthemum planting capacity, the tale of gratitude to glorify the family". However, when we probe into the behavior of the three characters revised by Osamu Dazai, we recognize the conflict with "the tale of gratitude".

This study thus focuses on the behavior of characters. First, we compare the difference and similarity with the original work. For a "new system", we explore the meanings in the same period and analyze the

* Assistant Professor in the Department of East Asian Languages and Literature at the National University of Kaohsiung

臺灣大學學術期刊資料庫

underlying complicated and profound political issue of East Asia from this “tale of gratitude” of “love stories” during that era.

Keywords: *Strange Stories from a Chinese Studio*, Huang Ying, Shitaisei, romanticism, new order of East Asia

臺灣大學學術期刊資料庫

太宰治「清貧譚」試論
—登場人物の改変と同時代東亜情勢との接点に触れつつ—

何資宜*

要旨

太宰治「清貧譚」(『新潮』1941.1) は、「かの聊斎志異の中の一篇」(筆者注「黄英」) に基づき、「二十世紀の日本の作家」である「私」が「不逞の空想を案配し」た「創作」である。

この物語には「異類婚・恩返しという原典の伝承的モチーフ」が見られ、「大筋は家を富ませることに向けて菊作りの超人性を発揮する報恩譚」として読めなくもない。だが、太宰によって改変された三人の登場人物の言動に着目すればするほど、この「愛情あふれる」「報恩譚」にいささか違和感を感じざるを得ないのである。

本稿は登場人物の言動に着目し、原典からの改変を比較したうえで、この「妙な」「一家三人」の構図と同時代東亜情勢との接点を明らかにする。更に「清貧」という言葉の持つ反語的意味を抽出し、「新体制」という「ロマンチシズム」の底に秘し隠されている、戦時下日本の政治的・経済的(リアリズム)問題を浮き彫りにしたい。

いわば、日中関係が緊張している時期に、あえて中国「文学の古典」を題材にしつつ、内閣の唱える「新体制」を茶化す作品を「創作」することこそ、太宰治という「二十世紀の日本の作家」の「不逞」の作為ではなかろうか。

キーワード：聊斎志異、黄英、新体制（東亜新秩序)、日満支、ロマンチシズム

* 国立高雄大学東亜語文学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

太宰治「清貧譚」試論
—登場人物の改変と同時代東亜情勢との接点に触れつつ—

何資宜

一、はじめに

太宰治「清貧譚」(『新潮』1941.1)は、「かの聊斎志異の中の一篇」(筆者注「黄英」)に基づき、「二十世紀の日本の作家」である「私」が「不逞の空想を案配し」た「創作」である。翻案色が濃いため、これまでの研究史では、典拠との比較や、比較による作家の戦時下姿勢や作意などを読み取ろうとするものが大半を占めてきた[1]。

物語内部の読みに関わる先行論を概観すると、才之助の「清貧」の主張が額面通りの理念ではないことはもはや共通認識と言える。登場人物の関係に着目する論考も多いなか、一つ気になる説がある。それは木村小夜(2012.3)の示した「日本の異類婚姻譚のパターン[2]」である。

確かに、「異類婚・恩返しという原典の伝承的モチーフ[3]」が太宰の「清貧譚」にも見られ、「大筋は家を富ませることに向けて菊作りの超人性を発揮する報恩譚[4]」(木村)として読めなくもない。だが、太宰によって改変された三人の登場人物の言動に着目すればするほ

---

1 村松定孝(1969.3)「太宰治と中国文学—『清貧譚』と『竹青』について—」(『比較文学年誌 5』81-94)、鈴木二三雄(1969.3)「太宰治と中国文学(二)—『清貧譚』と『竹青』—」(『立正大学国語国文』)、大野正博(1971.5)「聊斎志異『黄英』の研究—太宰治『清貧譚』との比較による作意の考察—」(『集刊東洋学 25』21-38)、鴇田亨(1994.4)「太宰治『清貧譚』論」(『言文 40』57-66)、榎本重男(2000.3)「太宰治の『清貧譚』考—『聊斎志異』の『黄英』と比較して—」(『人文社会科学研究 40』5-26)、王浄華(2006.11)「『清貧譚』と『竹青』について」(『国語の研究 32』17-30)、藤原耕作(2006.1)「太宰治文学と中国—『清貧譚』と『黄英』—」(『叙説 10』110-120)、陳愛陽(2010.3)「異文化の境目にある「自我意識」—『聊斎志異・黄英』から太宰治の『清貧譚』へ」(『日本語日本文学 20』47-52)、劉金宝(2011)「太宰治と中国古典(一)—『清貧譚』と『聊斎志異』の『黄英』との比較—」(『近代文学論集 37』78-86)

2 木村小夜(2012.3)「太宰治『清貧譚』論—ロマンチシズムから追放されない男—」『香椎潟』64 頁。

3 前掲木村小夜、65 頁。

4 前掲木村小夜、65 頁。

臺灣大學學術期刊資訊網

ど、＜救うべきものを救い、それによってめでたい結末を迎える＞という従来の公式とは異なる、この〈報恩譚〉に少なからぬ違和を感じざるを得ないのである。

本稿は登場人物の言動に着目し、原典からの改変を比較したうえで、「新体制」という言葉によって提示された同時代言説を触れつつ、この「愛情あふれる[5]」（吉岡）〈報恩譚〉の背後に秘し隠されている政治的・経済的問題を浮き彫りにしたい。

二、内実不明な「御恩報じ」

登場人物の関係を検討する際、まず気になる言葉がある。それは「御恩報じ」という言葉である。この言葉を機に、「才之助の家」に「一まづ世話になる」はずの陶本姉弟が、結局のところ長く住み込むことになってしまうことは言うまでもないが[6]、それに加え、物語中には四回[7]も使用された言葉であり、そのことを容易に看過するわけにはいかない。

そもそも、陶本姉弟が才之助の家に「一まづ世話になる」きっかけには、「清貧譚」とその原典である「黄英」に著しい違いが見られる。原典では主人公の馬子才が陶という相手の少年と菊の栽培法を論じ合っているうちに、「馬はひどく悦んで」「馬はいそいそとして云つた」とあるように、すっかり意気投合した上、行き先の定まらない旅をしている姉弟に宿泊場所を提供するために、彼らを自分の家へ連れて行くのである。（「僕の家は貧乏ですが、榻を置く位の所はあります。きたなくておかまひがなけれや、他へ往かなくつてもいいぢやありませんか」『聊斎志異』「黄英」211 頁）

一方「清貧譚」では、才之助は「自信を失ひ、はては泣き声にな

---

5 吉岡真緒（2004）「太宰治『清貧譚』論―物語の胎動」『曙光 2』24 頁。

6 才之助の家についた際、黄英が始めて「庭も広いやうだし、これからお前（筆者注、三郎）が、せいぜい佳い菊を植ゑてあげて、御恩報じをしたらいいのよ。」という言葉を口にした。それに対し、弟である三郎は「おやおや、姉さんは、こんなところに、ずつと永く居るつもりなのですか？」と応える。

7 厳密に言えば、「御恩報じ」という言葉は三回出ているが、もう一つは「あなたの御情にお報いしたくて」という表現を用いている。そして四回とも、黄英の口より述べられている。

り」、「やり切れない思ひ」で、「ひとめでいいから、私の菊を見てもらひたいものです。」、「まづ私の家へいらして、ゆつくり休んで、それからお捜しになつたつておそくは無い。とにかく私の家の菊を、いちど御覧にならなくちやいけません」と、なかば強引に姉弟を自宅に招いたのである。

結局のところ、「才之助の熱心な申し入れを拒否しかねて、姉と弟は、たうとうかれの向島の陋屋に一まづ世話になる事になつた。」というのだが、才之助の家についたら、原典では「陶は喜んでそこに居つて、毎日北の庭へ来て馬のために菊の手入れをした」と語っている一方、「清貧譚」では、「姉弟は、互ひ顔を見合わせて溜息をつ」き、「姉さん、これあいけない。とんだ人のところに世話になつちやつたね。」と三郎は言う。

このように両者を照らし合わせると、その違いは一目瞭然である。そもそも、「清貧譚」において、才之助が旅の途中に出会った姉弟を無理やり家まで誘ったのは、あくまでも「何とかして、この少年に、自分の庭の菊を見せてやつて、あつと言わせてやりた」いからである。原典である「他へ往かなくつてもいいぢやありませんか」という一文がひそかに消されることからも分かるように、才之助には陶本姉弟を長く世話するつもりがなかったのである。いわばこの物語では、陶本姉弟に「御恩」と感じられるほどのものを与えようとしたと理解できる箇所が少しも見当たらないのである。

それにも関わらず、「一夜」お世話になっただけの黄英は、なぜだかそれ以来しきりに「御恩」という言葉を口にする。こうした展開を目にする読者には、「彼女が《御恩報じ》と言っているが、才之助にたいする菊の精としての感謝の気持ちであることが、あとで振り返ってみたときでも、はっきりとはわからないのである。[8]」（榎本）という感想を抱かせても無理はないであろう。

さらに言えば、報恩する側である黄英の目的はといえば、「大筋は家を富ませることに向けて」（木村）いるのであろうが、「黄英・

[8] 前掲榎本重男、12頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

三郎に巡り会う以前の才之助は、貧しくともそれを苦にせず、菊を愛する自分の生活にある程度満足し日々を送っていた[9]」（米田）という。それに加え、姉弟の「御恩報じ」の申し出に対し、菊を売り物にする「三郎」に当の本人は、「私には、先祖からの多少の遺産もあるのです。自分ひとりの生活には、それで十分なのです。これ以上の富は望みません。よけいな、おせつかいは、やめて下さい。」と、はっきり拒絶していたのである。こうしてみると、報恩される側からしても、この内実不明な「御恩報じ」こそ文字通り「よけいな、おせつかい」であり、自ら望んでもいないものであると思われる。

陶本姉弟の〈恩返し〉によって、才之助は結果的に「一生あそんで暮らせる」ようになったが、〈致富〉まで才之助は、「菊作りとしての自尊心を傷つけられ」、「義憤やら嫉妬やら、さまざまの感情が怪しくごたごた胸をゆすぶり」、「絶望した」といった気持ちを噛み締めて耐えている。そしてその果てには、「才之助は、深く恥ぢた。それからちつとも剛情を言はなくなつた。」とあるように、「菊作りの志士」だった才之助は今までの誇りを諦めようとしているように見え、「才之助の屈服をより強く印象付け[10]」（藤原）られているのである。仮にこの物語を〈報恩譚〉として認めるとしても、これほどにも狼狽する〈恩人〉も極めて異例であろう。

さらにいうと、登場人物三人の間に起こる議論は、原典では二回であるのに対し、「清貧譚」では「不和のままで、わかれた。」「両家は、絶交したのである。」「才之助は、再び隣家と絶交しようと思ひはじめた。」「喧嘩わかれになってしまった。」とあるように、「へんな議論」が実に五回にわたり、同じ屋根の下に暮らしながらも、この三人の関係は実に「しつくりこなかつた」ものであった[11]。

9 米田幸代（2002.3）「太宰治『清貧譚』論」（『同志社国文学 56』、61 頁。
10 前掲藤原耕作、117 頁。傍点は筆者による。
11 原典における議論は、陶と馬の間に「売菊」をめぐるものが始めての喧嘩となり、その後は馬と黄英の間に「清者自清濁者自濁」の論争である。二回にわたる議論はそのまま「清貧譚」に借用されているが、その細部には所々太宰による改変が見られる。その二回に加え、「清貧譚」に付け加えられた「へ

臺灣大學圖書館期刊資料庫

言ってみれば、太宰による人物造形の改変からみると、報恩する側である黄英がしきりに言う「御恩報じ」の理由やその恩返しのやり方[12]も、また一方で報恩される側である才之助の結末も、典型的な〈報恩譚〉の〈めでたい〉ものとは程遠いのである。

三、語り手「私」の機能

だが面白いことに、先行論には「姉弟の『愛情』により才之助が『内面的な成長』を遂げ、救われた[13]」という捉え方があり、その数も決して少なくなかった。その例として次のようなものがまず挙げられよう。

> この黄英は、賢明で、才之助に誠実な「愛情」を寄せ続ける女性である。(中略)「清貧譚」は、原話の怪異性を極力排除して、才之助の「菊気違い」ぶりを戯画化しつつも、結末では彼の内面的な成長を描き、やさしい救いを用意している[14]。(鴇田亨)

> 物語空間をゆっくりとひと巡りしたうえで、私の想いは、「清貧譚」とは結局、〈菊の姉弟と人間との〉愛が倖せを喚ぶ〈物語〉なのだ、というところに帰着する[15]。(遠藤祐)

> 「清貧譚」の作中作家「私」は、江戸時代の風俗や地理を、才之助の内面が変化していく契機の背景として〈翻案物語〉に組み込んでいる。頑なであるがゆえに孤独な男が、愛情を知り、敬意を抱くことを学び、世間との交通を回復していく軌跡を描くに好個の舞台として、作中作家「私」は江戸の時空間を採用

んな議論」とは、〈黄英が痩せ馬を放した〉件と〈三郎に菊の作り方についての質問〉の部分、そして〈三郎が申し入れた入り婿をめぐる縁談話〉であった。

12 「日本人的感覚ならその関係上、当然相手の意に添ったり気を遣ったりしそうなところから、遠慮もおもねりもしない。恩返しする側であっても、彼らは恩に縛られない。むしろ、あまりにも自由奔放にふるまい、人間を翻弄し困惑させることが度々である。」前掲木村小夜、65頁。

13 前掲木村小夜、64頁。

14 前掲鴇田亨、63-65頁。下線は筆者による。

15 遠藤祐(2005.3)「菊の姉弟と人間との物語—『清貧譚』の登場人物たち」『学苑』、122頁。下線は筆者による。

臺灣藝術學院學術資訊庫

したのであった[16]。（高橋宏宣）

このように先行論を抽出してみると、〈愛情〉といった言葉があたかもキーワードのように浮かび上がる。だが前述のように、報恩する側の理由がはっきりせず、報恩される側もそれをありがたいとは思っていないという印象が残ることもまた否めない事実である。ならば、吉岡が言うところの「愛情あふれる[17]」印象はどのように生じたのであろうか。

それを解く鍵は、登場人物の造形を勝手に補足する語り手「私」の機能にあると思われる。「清貧譚」における才之助は、「菊の花が好き」で、傍目からみれば「菊気違ひ」な人であった。一見して平凡な人物であるゆえに、語り手「私」によって「馬山才之助といふ、つまらない名前の男」であるとばっさり切り捨てられている。しかし一方で、物語中にこの「私」が所々顔を出し、才之助の内面まで足を踏み入れ、常に主人公の言動を勝手に補足をしているからこそ、「清貧譚」が〈つまらない物語〉に終始しなかったのだと思われる。

では、「私」によって語られた才之助はどんな人物であろうか。例えば、道端でばったり出会った陶本姉弟を強引に家まで誘う場面では、「私」は次のように表現している。「才之助は、躍起になつて言へば言ふほど、自信を失ひ、はては泣き声になり」、「やり切れない思ひで」「すでに騎虎の勢ひである」という、「私」のこのような説明からは、「おのれの思いつきにとらわれて、前後の辯えもなくすぐに動く、軽はずみな才之助[18]」（遠藤）という印象が強まるのみである。

才之助への「私」のこうした言い回しは冒頭だけではない。「まるでさむらひのやうな口調で言つた。」／「『負けました。』と才之助は、やけくそに似た大きな声で言つた。」／「やはり男の意地で、へんな議論をはじめてしまつた。」／「才之助は、言葉の行きがかりから、

[16] 高橋宏宣（2005.8）「太宰治『清貧譚』における〈江戸〉」『解釈』、21 頁。下線は筆者による。
[17] 前掲吉岡真緒、24 頁。
[18] 前掲遠藤祐、112 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

更に更に立派な事を言はなければならなくなつて、心にもないつらい宣言をしたのである。（中略）ばかな事になつてしまつた。」等が見出される。

このように列挙してみると、確かに才之助の言動は「子供っぽ[19]」く感じられるものがある。こうして「私」によって「子供染みてすぐむきになる性分[20]」（遠藤）と決め付けられた才之助に対し、「色が溶けるほど白く、姿もすらりとしてゐた」「黄英」の、「あの柔らかな清らかさ」や「白い柔らかい蝶」のイメージが相対化され、結局のところ、「黄英には頑是ない子供をあやす母親のような優しさが感じられ[21]」（榎本）、「頑迷な才之助を包み込むようなやわらかさこそが彼女の持ち味[22]」（藤原）と読まれるようになったのである。

いわば、「私」によって付け加えたこれらの記述が、この物語を「頑なであるがゆえに孤独な男が、愛情を知[23]」る物語（高橋宏宣）／「〈菊の姉弟と人間との〉愛が倖せを喚ぶ〈物語〉[24]」（鴇田亨）として受容される基盤を整えたのであると言えよう。

四、「あの柔らかな清らか」な黄英の二面性

ところで、「あの柔らかな清らかな」黄英は、果たして本当に、先行論で説かれれているような「愛情あふれる」（吉岡真緒）人物なのであろうか。この疑問が生じたのは、「『清貧は、いやぢやないわ。』と言つて」「白い柔らかい蝶」と化し、「才之助の汚い寝所に」「忍び入つた」黄英の、その後夫となった才之助に対する言動は、実に「白い柔らかい」ものとは考えがたいからである。

「才之助の汚い寝所」に住み始めた黄英は、「やがてその茅屋の壁に穴をあけ、それに密着してゐる陶本の家の壁にも同様に穴を穿ち、自由に両家が交通できるやうにしてしま」い、「自分の家から、あれ

19 前掲遠藤祐、113 頁。
20 前掲遠藤祐、113 頁。
21 前掲榎本重男、20 頁。
22 前掲藤原耕作、113 頁。
23 前掲高橋宏宣、21 頁。
24 前掲鴇田亨、65 頁。

臺南大學學術期刊資料庫

これと必要な道具を、才之助の家に持ち運ん」だのである。「才之助には、それが気になつてならなかつた。」ため、夫婦の間ではまたも議論が起こった。

ここまでの記述は言葉遣いこそ違うものの、殆どの内容は原典にも見られる。注目すべきなのは、その後から展開される両者の違いである。

そこで黄英が云つた。

『あなたが金持が厭だし、私は貧乏ができないし、しかたがなければ、あなたと家を別けて、清い者は清く、濁つた者は濁つてることにしたなら、さしつかへがないぢやありませんか。』

そこで庭の中に茅葺屋根を建てて馬を住まはし、きれいな婢を撰んでつけてあつた。馬はそれでおちついたがしかし数日すると、ひどく黄英のことが思はれるので、呼びにやつた。黄英はどうしても来なかつた。馬は仕方なしに自分から黄英の方へ往つた。馬はそれから一晩おきに黄英の方へ往くのが例になつた。黄英は笑つて、『東食西宿ですね、廉潔な人はこんなことをしないでせうね。』

と云つた。馬も亦自分で笑つて返事ができなかつた。そこでたうとう復た初めのやうに一緒にゐることになつた。(『聊斎志異』「黄英」218 頁。)

「わかれるより他は無い。」才之助は、言葉の行きがかりから、更に更に立派な事を言はなければならなくなつて、心にもないつらい宣言をしたのである。「清い者は清く、濁れる者は濁つたままで暮らして行くより他は無い。私には、人にかれこれ命令する権利は無い。私がこの家を出ていきませう。あしたから、私はあの庭の隅に小屋を作つて、そこで清貧を楽しみながら寝起きする事に致します。」ばかな事になつてしまつた。けれども男子は一度言ひ出したからには、のつぴきならず、翌る朝さつそく庭の隅に一坪ほどの掛小屋を作つて、そこに引きこもり、寒さに震へながら正座してゐた。けれども、二晩そこで清貧を

楽しんでゐたら、どうにも寒くて、たまらなくなつて来た。三晩目には、たうとう我が家の雨戸を軽く叩いたのである。雨戸が細くあいて、黄英の白い笑顔があらはれ、

「あなたの潔癖も、あてになりませんわね。」

才之助は、深く恥ぢた。それからは、ちつとも剛情を言はなくなつた。（「清貧譚」139-140 頁）

このように並列させると、原典の方には、黄英の夫に対する愛情や労わりが伺える。別居する展開においても、原典では黄英は馬のためにしっかりとした「茅葺屋根」を作り、さらに「きれいな婢」までつけてやり、馬を「おちつ」かせてやっており、また、夫婦和解のところでも、「馬も亦自分で笑つて返事が出来なかつた。そこでたうとう復た初めのやうに一緒にゐることになつた。」（「黄英」）ことで解決される。

一方、「才之助は、深く恥ぢた。それからは、ちつとも剛情を言はなくなつた。」（「清貧譚」）からは、「一坪ほどの掛小屋」を自分で作り、「寒さに震へながら正座してゐるた」才之助の姿が滑稽なものとして映るだけで、黄英からの〈愛情〉らしきものは見受けられない。

さて、ここでは前の頁に見られる波線部に関心を払ってみよう。「陶本の家」、「才之助の家」、「我が家の雨戸」とあるように、「両家」を意図的に区別した描写が「清貧譚」では特に目立っているのである。だが忘れてはならないのは、「陶本の家」はもともと才之助の「菊畑の中の納屋」であり、のちに大もうけできるようになった陶本の菊畑さえ、最初は「あの納屋の裏のはうに、十坪ばかりの空地」でしかなかった。つまり語り手である「私」があえて「両家」という表現を使うものの、もとを正せば「陶本の家」も「才之助の家」も、すべて才之助にとっての「我が家」である。

「たうとう我が家の雨戸を軽く叩い」て入室の許可を乞う才之助の姿が滑稽であればあるほど、その一方で、「才之助の家」を知らずしらずの間に「我が家」にしてしまった黄英からは、その「白い笑顔」の背後に隠された二面性も自ずから匂ってくるのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

この物語では黄英だけがよく「御恩報じ」を口にするが、この言葉が最初に出てきたのは、才之助の家で一夜過ごした後に起こった〈痩馬の一件〉のところからであった。あの〈痩馬の一件〉は原典にはなく太宰の独創である。この一件によって才之助と三郎がもめるようになったが、黄英が「納屋から、幽かに笑ひながら出て」くると、

> 三郎や、あやまりなさい。あんな痩馬は、惜しくありません。私が、逃がしてやつたのです。それよりもこの荒らされた菊畑を、すぐに手入れしておあげなさいよ。御恩報じの、いい機会ぢゃないの。」
>
> 「なあんだ。」三郎は、深い溜息をついて、小声で呟いた。「そんなつもりだつたのかい。」
>
> 弟は、渋々、菊畑の手入れに取り掛かつた。(「清貧譚」132-133)

第二節で述べたように、「つとめ口を捜さなければいけません」という陶に、才之助は「まづ私の家へいらして、ゆつくり休んで、それからお捜しになつたつておそくは無い。とにかく私の家の菊を、いちど御覧にならなくちやいけません」と、あくまでも菊自慢の気持ちで二人を家まで招いたのである。そのため、翌日になるとこの二人は、当然ながら「それから（筆者注、「つとめ口を」）お捜しにな」るために出て行くはずだったが、「ずつと永く居るつもり」の黄英は、ここで自分の馬をわざと放し、他人の大事な菊畑を「滅茶苦茶にしてしま」ったうえ、あろうことか「御恩報じの、いい機会ぢやないの」というのである。

常識から考えれば、こうした場合は「御恩報じ」というよりも、詫びてゆるしを乞う方が適切なはずである。だが、「あの柔らかな清らか」な黄英は、この〈痩馬の一件〉以来つねに「御恩報じ」という＜内実不明な奇麗ごと＞を口にし、「一まづ世話になる」だけなはずの「才之助の家」の敷地に、「才之助に一言の相談もせず、大工を呼んでいきなり」「陶本の家」を建て、さらに同居同然の形へ「両家の区別がわからないやうに」改造し、両家の家を完全なる「我が家」

臺灣大學學術期刊資料庫

にしたのである。

五、自ら死（幸せ）を選んだ三郎

そして「あの柔らかな清らか」な黄英に目を惑わされた読者は、いよいよ「清貧譚」の結末を迎える。この結末こそ最も大きな改変が行われた箇所である。

> 一日、一家三人、墨堤の桜を見に出かけた。ほどよいところに重箱をひろげ、才之助は持参の酒を飲み始め、三郎にもすすめた。姉は、三郎に飲んではいけないと目で知らせたが、三郎は平気で杯を受けた。
>
> 「姉さん、もう私は酒を飲んでもいいのだよ。家にお金も、たくさんたまつたし、私がゐなくなつても、もう姉さんたちは一生あそんで暮らせるでせう。菊を作るのにも、厭きちやつた。」と妙な事を言つて、やたらに酒を飲むのである。やがて酔ひつぶれて、寝ころんだ。みるみる三郎のからだは溶けて、煙となり、あとには着物と草履だけが残つた。才之助は驚愕して、着物を抱き上げたら、その下の土に、水々しい菊の苗が一本生えてゐた。はじめて、陶本姉弟が、人間でない事を知つた。けれども、才之助は、いままでは全く姉弟の才能と愛情に敬服してゐたのだから、嫌厭の情は起こらなかつた。哀しい菊の精の黄英を、いよいよ深く愛したのである。（「清貧譚」140-141 頁）

今まで何度も「へんな議論」を起こし、「しつくりこなかつた」三人だが、結末において唐突にも「『一家三人』が仲好く麗まる春の一日を楽しむ[25]」（遠藤）ようになるという。「一家三人」が仲好く桜を見に出かけたところはいかにも日本らしい風習であるが、この「一家三人」という唐突な言葉と同じように、「愛情」・「いよいよ深く愛した」という表現もこの結末においてだけ突如に現れる。

「一生あそんで暮らせる」ほどの金もあり、あたかも一家団欒の

[25] 前掲遠藤祐、120 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

ように描かれたこの「一家三人」の構図は、確かに御伽噺の〈報恩譚〉で見られる〈めでたい〉結末のように見える。だが、物語の展開に従い、かつて「菊作りの志士」であった「才之助の屈服」（遠藤）と同じように、自ら人間世界と決別する「三郎」の言動も容易に看過できない。

引用文の下線部に注目すると、そこから三郎のこの「一家」における役割は、「姉さんたち」のために「せいぜい佳い菊を植ゑてあげて、御恩報じ」をする、つまり〈金を儲ける〉ことだけであることと明らかになるが、その一方で、そのことに対し当の本人はついに「厭きちやつた」と発言する。

そもそも、原典における菊畑は「陶は喜んでそこに居つて、毎日北の庭へ来て馬のために菊の手入れをした」場所であるが、「清貧譚」の三郎は姉に言われて「深い溜息をつ」き「渋々」菊畑の手入れに取りかかったのである。また、妙な「一家三人」となる縁談話のきっかけも、やはり三郎が姉に言われて、「思ひつめたやうな口調で」「姉さんと結婚して下さい。」と仲介をしたのである。

さらに言えば、原典では「秋になつて陶は花を車に載せて何処へか往つたが、翌年の春がすぎても帰らなかつた」というくだりがあるが、「清貧譚」では陶のこうした自由に遠出する箇所がすべて削除されている。菊作りの動機といい、縁談話のきっかけといい、さらに語られていないところまで合わせて考えていくと、確かに先行論が指摘した通り、「翻案に際して、三郎は従順で寛容な性質へと変えられたかのように見え[26]」（吉岡）なくもない。

このように従順な性格に改変された三郎だが、その「死」だけが姉の黄英ではなく自分の意思によるものであった。原典での陶生は、馬子才の友達である曾生を相手に、「二人はほしいままに飲んでひどく歓び」、飲みすぎたことが原因で「陶は地べたに寝て又菊となつた」というのに対し、太宰の描く三郎は「一家三人」で春を満喫する（はず）の際に、「飲んではいけない」という姉の合図をよそ

[26] 前掲吉岡真緒、23-25 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

に、「やたらに酒を飲み」自ら「死」を選んだのである。恐らく今まで姉の黄英に従順に従っていた三郎にとっては、この妙な「一家三人」の〈報恩譚〉に協力するよりも、見せ掛けだけの「愛情あふれる」（吉岡）人間世界と決別した方が、むしろ幸せだったのかもしれない。

以上、「清貧譚」における登場人物三人の構図をまとめると、三郎を陰で指図しつつ「才之助の家」を妙なかたちで「我が家」にする黄英、姉の言うことに対し「渋々」ながらも従う三郎、そして姉弟の「御恩報じ」を「よけいな、おせつかい」と思う才之助、となろう。言い換えれば、太宰は原典を下敷きにしながらも、もともと五人であった登場人物を三人にしぼり、さらにそれぞれの人物像を巧妙にリメイクしたのである。

六、「一家三人」の幻像—同時代の東亜情勢との接点に触れつつ

ここでは「清貧譚」において最も議論される箇所である冒頭部を見てみよう。

> このやうな仕草が果たして創作の本道かどうか、それには議論もある事であらうが、聊斎志異の中の物語は、文学の古典といふよりは、故土の口碑に近いものだと私は思つてゐるので、その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞の空想を案配し、かねて自己の感懐を託し以つて創作也と読者にすすめても、あながち深い罪にはなるまいと考へられる。私の新体制も、ロマンチシズムの発掘以外には無いやうだ。（「清貧譚」127 頁）

ここには時代のキーワードが秘められているため、この物語を「シリアスな国内／外の政治的イシューを寓話的に描出した小説」と説く松本和也の論は、参考に値するものが多い。だが、氏は東亜の国際情勢に注目するよりも、その論文の表題が示したように「菊を作ること／売ること」（すなわち「資本主義」社会における行為）に焦点を置き、「『清貧譚』は、“作ること／売ること”として才之助／三

臺灣大學學術期刊資料庫

郎という登場人物（の設定）が担った対立を通して、支那事変下／新体制下の日本で、資本主義（批判）の是非を問う一面を、内包していたことになる[27]」と敷衍していく。

本稿では「二十世紀の日本の作家」・「新体制」・「ロマンチシズム」といった時代のキーワードのうちの「新体制」という言葉と、それによって提示された日本政府の対中意識に特に着目したいのである。その「新体制」とは、支那事変の起こった当時の首相であった近衛文麿が再び内閣を組織し、組閣の翌月に当る 1940 年 8 月に発表された対中外交政策のことである[28]。「新体制」という新語が発表された当時、その「内実が曖昧で抽象的」であったものの、「対支戦線の推移をにらんだ、東亜新秩序（昭和 13）の延長線上にある方針であることは疑いようがない」[29]とされた。

周知の通り、「『聊斎志異』の本格的な翻訳は明治になってからであ[30]」（野寄勉）り、「清貧譚」が発表されるまで芥川龍之介や佐藤春夫といった大家による翻案作品が多く世に出回っている。だが、太宰はなぜだか数十年を経た 1940 年になって始めて『聊斎志異』（ひいては中国文学）に関心を持つようになった[31]。

「清貧譚」が執筆された 1940 年を振り返ると、六月、近衛内閣が新体制推進運動の決意表明をし、八月、「新体制」（対中外交政策）が日本中を席巻しており、十月、大政翼賛会発足等、日中戦争長期化に伴い挙国一致体制の強化が着々と遂行されていた。そしてちょ

---

27 前掲松本和也、169 頁。

28 「新体制」という新語が始めて現れたのはその年の六月二十四日であり、その談話の内容は次のようなものとなる。「内外未曾有の変局に対応するため、強力なる挙国政治体制を確立する必要は、何人も認めるところである。自分（筆者注、近衛文麿）は今回樞密院議長を拝辞し、斯くの如き新体制の確立のために微力をささげ度いと思う。」参照元；高見順（1958）「文壇新体制」『昭和文壇盛衰史』柏書房 185 頁。

29 松本和也（2013.3）「新体制（言説）のなかの太宰治「清貧譚」―菊を作ること／売ること」（『人文科学論集　文化コミュニケーション学科編 47』）162-163 頁。傍点は筆者による。

30 野寄勉（2005.1）「小説家が好きな『聊斎志異』」『アジア遊学 71』97 頁。

31 太宰文学には、中国に材をとった作品がいくつかある。まず、初期作品の「魚服記」（1933）が挙げられるが、それ以降は長いブランクが空いた。再び中国文学を題材にしたのは 1940 年以降となり、「清貧譚」（1941.1）、「竹青」（1945）、「惜別」（1945）である。

臺灣日語學習期刊資料庫

うど近衛内閣が決意表明を行う六月には、各新聞紙を飾る一大事が起きた。それは昭和十五年六月二十六日「満州国皇帝陛下来訪」に関する新聞記事である。

その内容の一端をみてみると、「わが建国二千六百年御慶祝のために、(中略) 満州国皇帝陛下には、本日横浜に御着、直ちに御入京遊ばされる。(中略) 恰も今年紀元二千六百年の式年に相当するは実に偶然でなく、後昆永くこの東亜新秩序の建設を以てわが国大発展の時期とし、今上陛下の赫々たる御偉績を仰ぐ[32]。」／「東亜においては日満両国が深き信頼と尊敬とをもつて相倚り組扶けすでに一体不可分、万代不易の関係を確立し今また新支那中央政府の成立により日満支三国を中軸とする東亜新秩序はようやく建設の途に進みつつあるのは洵に御同慶に堪えざるところである[33]」といった記述が各紙面に踊っていた。

これに関する新聞記事を一つ一つ読んでいくと、満州国との関係を触れるたび、「（日満支三国を中軸とする）東亜新秩序[34]」（新聞社説）という言葉が必ずといっていいほど現れていることが分かる。そのいずれも中国に深い関係を持つ深刻な問題であり、同時代を生きる人ならば、〈日満支〉〈満蒙生命線（東亜経済ブロック）〉[35]といった時代的キーワードを目にしない者はむしろ稀であっただろう。

日本の北支に対する動きは実に 1936 年の「満州開拓移民推進計画[36]」より始まっており、時代が進み 1940 年にはさらに中国全体に目

---

32 「社説　満州国皇帝陛下を迎えまつる」(1940.6.26)『大阪毎日新聞』。下線は筆者による。

33 「満州国皇帝陛下　けふ晴れの御入京　畏し天皇陛下駅頭に御出迎え」(1940.6.26)『大阪朝日新聞』

34 「社説　満州国皇帝陛下　奉迎」『大阪朝日新聞』(1940.6.26)

35 「満蒙は日本の生命線」とは昭和 6 年にのちの外相、松岡洋右が始めて唱え、世に広まったスローガンである。満州と内モンゴルは戦略的にも経済的にも日本の存亡がかかった地域だという意味である。

36 1936 年広田内閣は、「大陸への農業移民を最重要国策に掲げ、二十年で百万戸移住計画を決定し」、1936 年から 1956 年の間に 500 万人の日本人の移住を計画・推進した。同時に、20 年間に移民住居を 100 万戸建設するという計画（「二十か年百万戸送出計画」）も打ち出されたという。都築久義 (1985)『戦時下の文学』和泉選書、8 頁。

を向け、「新体制」（＝対中外交政策／東亜新秩序）を唱えようとしている。そこには満州国を指図しつつ北支を妙なかたちで「我が家」にしようとする日本、そして日本政府の言うことに「渋々」ながら従順にも従い満蒙生命線を支える満州国、さらに日本の東亜新秩序（＝支那を助け、東亜が西洋に抗する[37]）を「よけいな、おせつかい」とみる中国政府、こうした〈日満支三国〉の複雑な構図が潜んでいると思われる。

そしてここで再び同じ年に執筆された「清貧譚」の登場人物を思い出してみると、この妙な「一家三人」の様相は、不思議にも執筆当時における〈日満支〉の構図と重なる部分が大きいのである。

複雑でかつ深刻な日中関係であるゆえ、互いの利害関係等が物語の人物とは完全に合致するとまでは言えないが、少なくとも「しつくりこなかつた」この「一家三人」の人物像には、同時代における日本政府のこうした一連の対中政策を想起させるものがあると認められよう。

七、おわりに

最後に、物語の表題である「清貧」という言葉に注目してみたい。だがそれを触れる前に、まず日本が中国に手を出す経緯を、いま一度押さえておきたい。

1931 年、日本の関東軍が柳条湖事件を契機に中国軍と戦闘に突入し、満州を占領した。その後、内閣は事態不拡大の方針を決定したにも関わらず、関東軍はそれを無視し、自衛のためと称して戦線を拡大する。そうした動きの背景には、日本国内の問題として、世界恐慌や昭和恐慌と呼ばれる不景気から抜け出せずにいる状況があった。それに加え、1924 年にアメリカで排日移民法が成立され、今までアメリカやブラジルへの国策的移民が通用できなくなったため、数多い貧困農民の受け皿を作ることが急務となっていた。そこへ満州事変が発生すると、国威発揚や開拓地の確保などを期待した国民

[37] 「社説　新体制への態度」（1940.10）『日本評論』

世論を盾に、関東軍が戦線拡大を決行した。

さらに1937年7月、盧溝橋で日本軍と中国革命軍との衝突事件が起き、全面的な日中戦争に突入した。だが、当時両国とも宣戦布告を行わなかったため事変と称していた[38]が、日本政府が「戦争目的を明確に定義したのは、戦争勃発後、一年以上も経った昭和十三（1938）年十一月のこと」であった。「この時、近衛首相の『東亜新秩序』声明は、戦争目的に『東亜新秩序の建設』を掲げ、治外法権の撤廃・租界の返還や日中『経済合作』といった日中提携のための具体的な政策を打ち出して[39]」（井上）いた。

要するに、満州建国といい、日中戦争の目的といい、東亜新秩序という「ロマンチシズム」には、実に戦時下日本の経済的・政治的打算が絡んでいることがたやすく見受けられる。

そうしたことを念頭におきながら再び物語を見てみよう。「清貧は、いやぢやないわ。」と黄英は口ではそういうものの、その言葉とは裏腹に、「やがてその茅屋の壁に穴をあけ、それに密着してゐる陶本の家の壁にも同様に穴を穿ち、自由に両家が交通できるようにしてしま」い、結局のところ、「お金も、たくさんたまつた」だけでなく、才之助のものだった場所を完全に、黄英自身の「我が家」にしたのである。

「大筋家を富ませることに向けて菊作りの超人性を発揮する報恩譚[40]」（木村）という物語の展開が示したように、その趣旨は「清貧[41]」の意味は相反している。だが、太宰はあえて〈致富譚〉ではなく「清貧譚」と題した。つまり、黄英の言動と物語のタイトルからも確認できるように、物語における「清貧」という言葉は反語的に用いられているのである。

---

38 日本側では盧溝橋での事件を初め北支事変、後には支那事変の呼称を用いた。マスコミでは日華事変・日支事変などの表現が使われる場合もあった。一方、中国側では「七七事変」或いは「盧溝橋事変」と称している。

39 井上寿一（2007.7）『日中戦争下の日本』講談社、66頁。

40 前掲木村小夜、65頁。

41 辞書によると、「富を求めず、正しい行いをして貧しいこと」『デジタル大辞泉』（小学館）、「私欲をすてて行いが正しいために、貧しく生活が質素であること」『大辞林　第三版』（三省堂）といったものが確認できる。

1940 年 9 月、「日満支を一圏とする東亜新秩序建設」を謳歌する『新潮』のある文章には、「新政治体制といふのは、畢竟ロマンチシズムの運動にほかならない[42]」という一文がある。それに応えるかのように、五ヵ月後やはり『新潮』に発表された「清貧譚」にも、「私の新体制も、ロマンチシズムの発掘以外にはないやうだ。」という太宰の文章があった。そして、太宰はこの「妙な」「一家三人」(日満支)の造形を巧妙にリメイクしつつ、その「ロマンチシズム」を「発掘」することで、「お金」をめぐる「清貧(リアリズム)」の問題が横たわっていることを暗に仄めかされたのである。

日中関係が緊張している際に、あえて中国「文学の古典」を題材にしつつ、内閣の唱える「新体制」を茶化す作品を「創作」することこそ、太宰治という「二十世紀の日本の作家」の「不逞」の作為ではなかろうか。

【付記】本稿は科技部人文社会科学研究中心の研究助成(「太宰治翻案文学—『清貧譚』と『竹青』を例として」:MOST 104-2420-H-002-016-MY3-Y10401)による研究成果の一部である。

テキスト

蒲松齢著・田中貢太郎訳・公田連太郎註(1929.11)「黄英」『聊斎志異』北隆堂書店

太宰治「三月十日」(1940.6)初出誌未詳。引用は、『太宰治全集第十巻』筑摩書房による。

太宰治「清貧譚」(1941.1)「新潮」。引用は、『太宰治全集第三巻』筑摩書房による。

※本文における引用文の下線や傍点はすべて筆者によるもの。

42 「新政治体制とロマンチシズム」(1940.9)『新潮』、12 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

「社説　満州国皇帝陛下　奉迎」『大阪朝日新聞』（1940.6.26）
「満州国皇帝陛下　きょう晴れの御入京　畏し天皇陛下駅頭に御出迎え」『大阪朝日新聞』（1940.6.26）
「社説　満州国皇帝陛下を迎えまつる」『大阪毎日新聞』（1940.6.26）
「新政治体制とロマンチシズム」『新潮』（1940.9）
「社説　新体制への態度」『日本評論』（1940.10）
高見順（1958）「文壇新体制」『昭和文壇盛衰史』柏書房
村松定孝（1969.3）「太宰治と中国文学―『清貧譚』と『竹青』について―」（『比較文学年誌 5』）早稲田大学比較文学研究室
鈴木二三雄（1969.3）「太宰治と中国文学（二）―『清貧譚』と『竹青』―」（『立正大学国語国文』）
大野正博（1971.5）「聊斎志異『黄英』の研究―太宰治『清貧譚』との比較による作意の考察―」（『集刊東洋学 25』）、東北大学中国文史哲研究会
都築久義（1985）『戦時下の文学』和泉選書
鴇田亨（1994.4）「太宰治『清貧譚』論」（『言文 40』）、福島大学教育学部国語学国文学会
榎本重男（2000.3）「太宰治の『清貧譚』考―『聊斎志異』の『黄英』と比較して―」『人文社会科学研究 40』早稲田大学理工学部・一般教育人文社会科学研究会
米田幸代（2002.3）「太宰治『清貧譚』論」『同志社国文学 56』、同志社大学国文学会
吉岡真緒（2004）「太宰治『清貧譚』論―物語の胎動」『曙光 2』日中文化研究会
野寄勉（2005.1）「小説家が好きな『聊斎志異』」『アジア遊学 71』
遠藤祐（2005.3）「菊の姉弟と人間との物語―『清貧譚』の登場人物たち」『学苑』
高橋宏宣（2005.8）「太宰治『清貧譚』における〈江戸〉」『解釈』、解釈学会

臺灣大學學術期刊資料庫

藤原耕作（2006.1）「太宰文学と中国―『清貧譚』と『黄英』」『叙説 10』、叙説舎

松村明編（2006.10）『大辞林　第三版』三省堂

王浄華（2006.11）「『清貧譚』と『竹青』について」『国語の研究 32』

井上寿一（2007.7）『日中戦争下の日本』講談社

陳愛陽（2010.3）「異文化の境目にある「自我意識」―『聊斎志異・黄英』から太宰治の『清貧譚』へ」『日本語日本文学 20』、創価大学日本語日本文学会

劉金宝（2011）「太宰治と中国古典（一）―『清貧譚』と『聊斎志異』の『黄英』との比較―」『近代文学論集 37』、日本近代文学会九州支部

木村小夜（2012.3）「太宰治『清貧譚』論―ロマンチシズムから追放されない男―」『香椎潟』

松本和也（2013.3）「新体制（言説）のなかの太宰治『清貧譚』―菊を作ること／売ること」『人文科学論集』、文化コミュニケーション学科編

臺灣大學學術期刊資料庫